

明治以降、社会の変化とともに冠婚葬祭も次第に変容を遂げました。

その歴史をひも解きながら、我が国で発展した互助会と、

これにまつわる出来事をたどってみましょう。

### 共同体が儀式を司る

明治初期、東京などの都市部でも町内を中心に共同体で儀式を行っていた。葬儀は、自宅から葬儀会場へ向かう葬列(野辺送り)が重要とされた。婚礼については、



地域や経済的状況で異なるものの、家と親類と共同体の承認によって成立する点はその地域でも共通している。

### 皇太子時代の皇太子と九条家の節子さんが御成婚

神前結婚式の歴史は、1900(明治33)年、皇太子嘉仁殿下の御成婚が初めて宮中賢所大前で行われたことにさかのぼる。また、馬車でのパレードや新婚旅行に出かけた最初のロイヤルカップルでもあった。その翌年には日比谷大神宮(現東京大神宮)で模擬神前結婚式が開かれ、さらにその翌年には民間初の神前結婚式が行われた記録が残る。

### 神前結婚式の普及

地域によって伝統習俗が異なるため、婚礼のやり方に混乱が生じることも珍しくなかった。1899(明治32)年、華族女学校の校長が『新撰婚礼式』を著し、神前結婚式を提唱。翌年の皇太子嘉仁殿下の御成婚により、庶民の間で神前結婚式への憧れが高まった。

### 女性の自立 ～結婚観の変化

都市に住む中産階級が増え、男女平等や個人の自由など近代的な思想が発達したこの時代、女性の自立を求める気運が高まった。同時に、結婚や家族のあり方に対する人々の意識にも変化が生じ、冠婚葬祭に関するマニュアル本が多数発行された。

大正から昭和にかけて若者の間に断髪・洋装などのモダンなファッションを楽しむ「モボ・モガ(モダンボーイ・モダンガール)」が流行



### 皇太子時代の昭和天皇と久邇宮家の良子さんが御成婚

関東大震災の翌年の1月、皇太子裕仁殿下が久邇宮良子さんと御成婚。軍用機が首都の上空を飛行し、馬車が進む沿道に何千人もの観衆が詰めかけたというパレードは、大正天皇の御成婚時以上に華やかな式典となった。

1870年代

1880年代

# 明治

日清戦争  
(明治27、28年)  
1894、95年

1900年(明治33年)

1901年(明治34年)

日露戦争  
(明治37、38年)  
1904、05年

1910、20年代  
大正デモクラシー

# 大正

第一次世界大戦  
(大正3、7年)  
1914、18年

関東大震災  
1923年(大正12年)

1924年(大正13年)

世界恐慌  
1929年(昭和4年)

満州事変  
1931年(昭和6年)

日中戦争はじまる  
1937年(昭和12年)

太平洋戦争(第二次世界大戦)  
(昭和16、20年)  
1941、45年

# 昭和

### 最初の葬儀社の誕生

明治時代に台頭した富裕層を中心に、従来は夜に人目を忍び行われていた葬儀が、昼間に大規模に行われるようになった。これに伴い、葬列の担ぎ手の手配業や葬具のレンタル業などが発生し、最初の葬儀社が誕生した。



土葬の頃は、遺体を輿に寝かせて、日雇い労働者に担がせていた。火葬になって「輿」が祭壇の上に装飾となって残る

### 日本の産業革命

富国強兵政策で軽・重工業が発達。農村から都市部へ人口が移動した。

### 土葬から火葬へ

明治初期まで葬送の多くは土葬だった。しかし明治30年代、都市化が進んで人口が増えるとともに、土葬場所の確保が問題になった。近代的な火葬炉が登場し、併せて1897(明治30)年に伝染病予防法が制定され、火葬が一般的となった。

### 告別式の始まり

思想家・中江兆民が死去した際、宗教的儀式を廃し、友人の板垣退助らが哀悼の意を述べる「告別式」を行ったことを新聞各紙が報じた。以後、大正にかけて知識人を中心に「告別式」が浸透する。



自由民権運動を主導した中江兆民。その「告別式」は、特定の宗教に依拠しないセレモニーの先駆けに

### 葬儀の個人化

宗教的な儀式から、故人の生前の功績を讃えるスタイルへ変化

### 大規模霊園と葬儀施設の普及

1923(大正12)年4月、多磨墓地在オープン。人口増加で墓地スペースが無くなったためつくられた、この日本初の公園型霊園は人気なかった。しかし、関東大震災で下町の寺院墓地が壊滅し、区画整理事業で郊外に移転を余儀なくされたことで認知され始めた。この時代、土地の有効利用の観点から火葬場や斎場など葬儀関連施設が続々と登場した。



日本初の公営墓地として知られる青山霊園

### 葬儀は祭壇中心へ

葬列に代わって告別式が、喪に服するイベントとして社会的に位置付けられたこの時代、都市部では自宅での告別式が広まったことに伴い、祭壇が葬儀の中心に変わっていった。当初は、白い布をかけた白布祭壇が使用されたが、次第に祭壇の数や道具の種類が増えてランクが誕生。霊柩車が普及し始めたのもこの時期である。



自宅葬の様子



昭和初期の霊柩車カタログから

戦時中は華やかな葬儀ができなくなる  
火葬のための重油が不足

### 家制度の廃止

民法改正では、「家制度」を廃止し、「結婚と離婚の自由」を含む男女平等の権利が定められる。「新日本建設国民運動」の中で贅沢や無駄をはぶいた合理的な生活慣習を目指す「生活改善運動」が掲げられた。

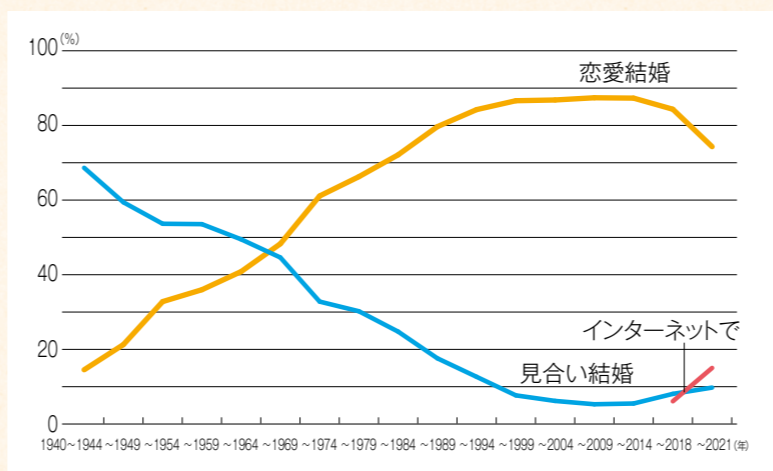
1948(昭和23)年、都民葬がスタートし、自治体が冠婚葬祭に参入。



戦後、全国各地で普及・推進された「生活改善運動」の一環として栃木県高根沢町で行われた模擬結婚式の模様(『高根沢町史 通史編II 近現代』より)。

### 恋愛結婚と見合い結婚の構成比

対象は初婚どうしの夫婦。国立社会保障・人口問題研究所(第10回までは旧厚生省人口問題研究所)「出生動向基本調査」第7回調査(1930~39年から1970~74年)、第8回調査(1975~79年)、第9回調査(1980~84年)、第10回調査(1985~89年)、第11回調査(1990~94年)、第12回調査(1995~99年)、第13回調査(2000~04年)、第14回調査(2005~09年)、第15回調査(2010~14年)、第16回調査(2015~18年、2019~21年6月)による。



戦前は見合いによる結婚が約7割を占めたが、戦後は一貫して減少。1960年代後半に恋愛結婚との比率が逆転した。近年では「婚活アプリ」などインターネットを介して結婚に至るケースも急増。従業員への福利厚生の一環として「企業専用」のマッチングアプリに加入する企業や、少子化対策として婚活アプリに予算投入する自治体なども現れている

### 皇太子時代の明仁上皇と正田美智子さん(美智子上皇后)御成婚



ミッチー・ブームの影響で結婚観に変化

「家制度」の時代は、親が決めた相手との結婚が一般的だったが、戦後の民主主義の普及とミッチー・ブームの影響で、結婚は恋愛の帰結であるという意識が広まった。

### ホテル建設ラッシュ

東京オリンピックに向けて、東京を中心に各地で国際的な規模のホテルが次々と建設される。

1946年(昭和21年) 日本国憲法公布  
1947年(昭和22年) 民法の改正  
**昭和**

1948年(昭和23年)

1950~30年代 60年代

1951年(昭和26年) 第1回「紅白歌合戦」放送

1958年(昭和33年)12月 東京タワー完工式

1959年(昭和34年)

1964年(昭和39年) 東京オリンピック

1965年(昭和40年)

高度経済成長期

1970年(昭和45年) 大阪万博

1971年(昭和46年) ニクソン・ドルショックの切り上げ

復員者の引き揚げ帰国  
↓  
結婚件数の増加  
↓  
団塊世代誕生

### 冠婚葬祭互助会設立

1948(昭和23)年、神奈川県横須賀市で、会員同士が月20円ずつ出して万が一の事態に助け合う、日本初の冠婚葬祭互助会「横須賀冠婚葬祭互助会」が誕生。

### 互助会が結婚式場市場へ参入

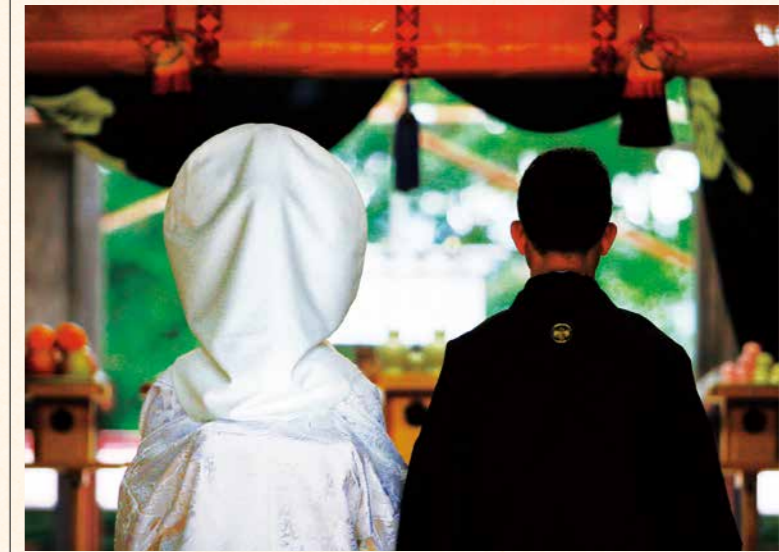
地方では花嫁行列と挙式が一般的だったが、都市部への人口移動で婚礼方式が一変。地盤を持たない都市住民の間で、神社での挙式と別会場での披露宴を行うスタイルが広がった。互助会は両方の機能を備えた自前の式場を各地に建て始めた。



1957(昭和32)年、横須賀に長寿閣(左)、1963(昭和38)年、京都に玉姫殿(右)が誕生

### ブライダル市場本格化

高度経済成長の波に乗り、互助会業界はベビーブームを先取りする形で、式場建設ラッシュが続き、「総合儀式産業」として開花。その地歩を確実なものとした。



### 互助会保証株式会社設立

割賦販売法改正に伴う前受金保全措置としての保証機関の設立



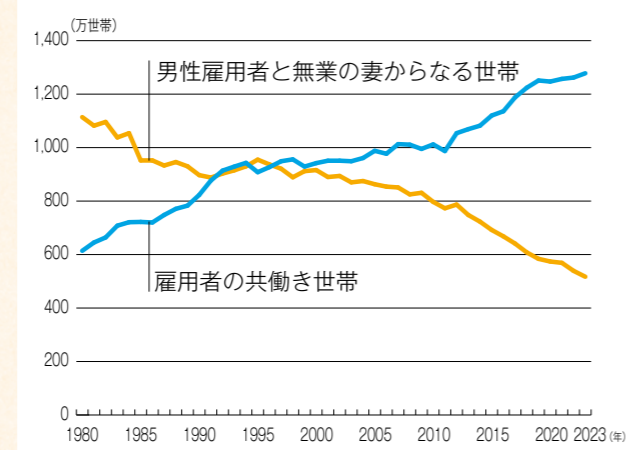
1973(昭和48)年2月、互助会事業の前受金保全措置としての供託委託契約の受託を事業目的として、東京都千代田区岩本町に設立。当初の資本金は1億2,000万円、契約先互助会は193社、供託委託契約残高は24億円。

これによって互助会事業が法的にも社会的地位が確保され、消費者に信頼感と安心感を与えることとなった。

### 結婚観の変化

女性の高学歴化と社会進出が進んだこの時期、結婚・出産後も働き続ける女性が増加。1970(昭和45)年に頂点に達した専業主婦率は下降し始め、結婚観や家族のあり方が大きく変化する。

### 共働き世帯の増加



### 石油危機後の不況

生活の簡素化、省エネルギーを旗印に、国民生活の改善が求められた。

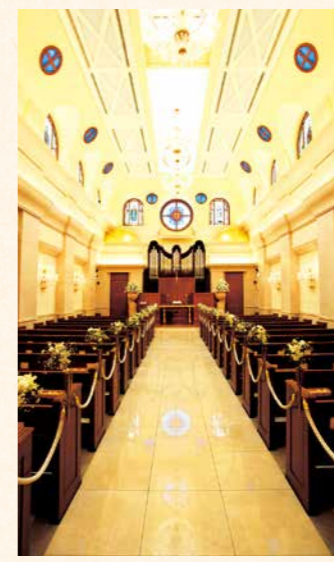
### 派手婚ブーム

急成長を遂げたブライダル市場において、披露宴は「祝う、祝われる」から「見せる、見せられる」スタイルへ変貌。ケーキ入刀やキャンドルサービス、花束贈呈など、さまざまな演出が生まれ、挙式はますます豪華に。さらに、映像を用いた演出が盛んに。

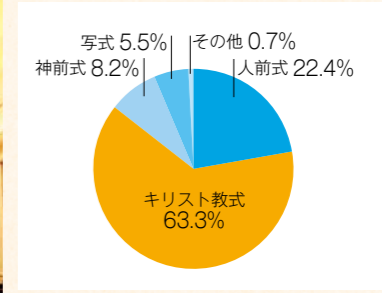


### チャペルウェディングの人気

芸能人の結婚式が報道されるようになり、1980年代以降はチャペルウェディングが神前結婚式に代わって人気に。同時に媒酌人(仲人)を立てる結婚式も減少していった。



### 年間形態別挙式取扱件数の割合



総務省・経済産業省「2020年経済構造実態調査報告書 二次集計結果【乙編】」より

昭和  
1972年(昭和47年) 割賦販売法改正  
1973年(昭和48年) 第1次石油危機

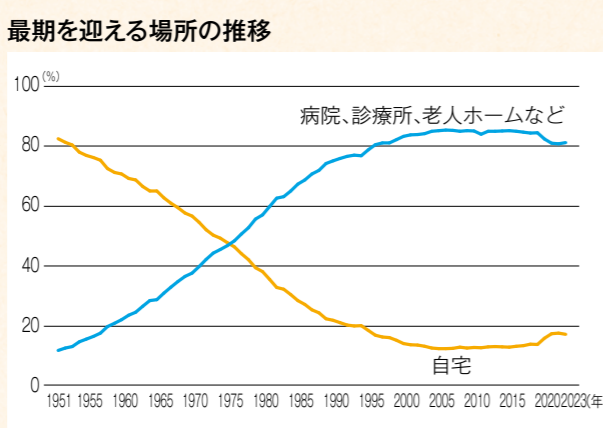
1975年(昭和50年)  
1980～90年代

平成  
1989年(平成元年) 元号が平成に変わる  
1989年(平成元年) 12月 日経平均株価史上最高値  
1991年(平成3年) バブル崩壊

1995年(平成7年) 阪神・淡路大震災

### 終末の場所の変化

高齢者の核家族化、高度医療の進展等により、人生の最期を迎える場所が自宅から病院などの施設に移った。



厚生労働省「令和5年人口動態調査」より

### (社)全日本冠婚葬祭互助協会設立

1973(昭和48)年11月、業界の横断的組織の役割を果たす社団法人全日本冠婚葬祭互助協会(全互協)が設立される。石油危機による景気低迷は冠婚葬祭市場にも深刻な影響を及ぼしたが、全互協と互助会保証の2つの組織の設立が消費者の信用を獲得し、業界成長の弾みとなる。

### 斎場建設ラッシュ

1990年代後半以降、斎場が相次いで建ち始め、6,000以上のセレモニーホールが誕生。その先駆けとなった1978(昭和53)年オープン総合葬祭会館では、当時珍しく、複数の式場・控室のほか、会食・法要会場や浴室まで完備しており、注目を集めた。この時の斎場建設ラッシュが後の葬祭業の発展につながり、互助会においても冠婚型から葬祭型へと比重が変化していく。



1978(昭和53)年、北九州に小倉紫雲閣が誕生

### 自宅葬から斎場葬へ

集合住宅の急増や個人のプライバシーに対する意識が強くなったこの時代、斎場の建設ラッシュが相次いだこともあって、葬儀が自宅葬から斎場葬に変わっていった。このことにより、葬儀の「死の暗いイメージ」が払拭された反面、地域コミュニティの希薄化をもたらした。



### 社会的地位の高まり

葬儀サービスの品質と葬祭士の社会的評価を高める目的で、1996(平成8)年「葬祭ディレクター制度」が誕生。また、2008(平成20)年、アカデミー賞を受賞した映画「おくりびと」により、葬祭業界の社会的ステータスが向上した。

### グリーンケアの時代へ

葬儀における互助会の位置づけとともに、消費者への影響も大きくなってきた。ソフト面の強化や故人を尊重する葬儀演出サービスから進化して、遺族への精神的な支援、悲嘆のプロセスへの対応を行うグリーンケアが注目される。遺族を孤独から救うため、さらなる支援システムの整備が求められている。



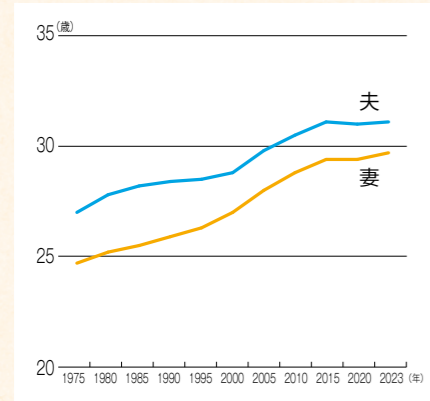
葬祭ディレクター 1級(ゴールドカード)、2級(シルバーカード)の認定証

葬祭業のエキスパートとしての知識・技能の向上とその社会的地位向上を図るべく、厚生労働省の認定のもとにスタートした「葬祭ディレクター技能審査」。1級および2級の資格保有者数の累計は約4万人を数える(2024年現在)。

### 結婚式の多様化

少子高齢化が進展し、結婚対象年齢人口が減少。晩婚化や未婚率の上昇、挙式を行わない層の増加、あるいは相次ぐ自然災害やパンデミックの発生などを受け、21世紀のブライダル市場は困難な局面を迎える。一方、海外を含むリゾート地で挙式を行う層、披露宴にかかる費用は増加傾向にあり、消費者ニーズは多様化。結婚情報誌の登場、インターネット環境の充実といった情報化も背景に、互助会式場の競争も厳しさを増した。

#### 平均初婚年齢の推移



2023年時点での平均初婚年齢は男性31.1歳、女性29.7歳。1955年時点と比較して、男性が+4.5歳、女性が+5.9歳と晩婚化が進んでいる。厚生労働省「人口動態統計」より作成

### カジュアルウェディングの人気

従来の挙式や披露宴ほどは形式ばらず、二次会や結婚報告パーティーよりもフォーマルなウェディングを指す。「1.5次会」とも呼ばれ、会場から衣装、食事、余興まで新郎新婦の希望に沿って選択できる自由度の高さから近年人気を博している。レストランやカフェ、ゲストハウスのほか、ライブハウスやキャンプ場で挙式(アウトドア婚)を行うなど、そのスタイルは実にさまざまである。



### フォトウェディングの浸透



記念写真の撮影だけを行う結婚式。「フォト婚」とも呼ばれる。「挙式は行わないが写真だけは残しておきたい」「再婚なので披露目の場は控えたい」「思い出の場所で撮影したい」といった多様なニーズに応じ、スタジオ、庭園やチャペル、観光地や絶景スポットなどへの出張撮影サービスを展開する事業者も増えている。

### ステイ(滞在型)ウェディングの登場



ガーデンテラス長崎ホテル&リゾート

人気リゾート地のホテルなどで、家族やゲストを含めて1泊2日~2泊3日程度のステイ(滞在)を楽しみながら行う結婚式。慌ただしく過ぎてしまいがちな挙式前後の時間を、親密な雰囲気の中で寛ぎながら過ごすのが魅力で、支持を集めている。

### 結婚式のDXとサステナブル化



コロナ禍では、結婚式や披露宴の様子をライブ配信し、ゲストにオンライン参加してもらうスタイルの結婚式が登場。遠隔地の友人や施設入居者(新郎新婦の祖父母など)も気軽に参加できるという利点があり、リアル(会場での挙式)とオンライン配信を同時に行うハイブリッド型ウェディングも浸透しつつある。また昨今、SDGsを意識した「サステナブル結婚式」が話題に。衣裳やギフトなどに環境に優しい素材を使ったものを選んだり、適量な料理・飲物をゲストに提供しフードロスを選んだりといった例がある。

## 互助会保証50周年

2023年(令和5年)2月、互助会保証株式会社が設立から50年の節目を迎える。2024年5月末現在の資本金は39億8,000万円、契約先互助会数は148社、供託委託契約残高は7,907億円。

2001年平成13年9月  
米国同時多発テロ

2011年平成23年3月  
東日本大震災

2012年平成24年5月  
東京スカイツリー開業

2013年平成25年9月  
夏季五輪東京開催が決定

2016年平成28年4月  
熊本地震

2019年令和元年4月  
明仁さま生前退位

2019年令和元年5月  
元号が令和に変わる

2020年令和2年1月頃  
新型コロナウイルス感染症流行

2021年令和3年7月8日  
東京2020オリンピック

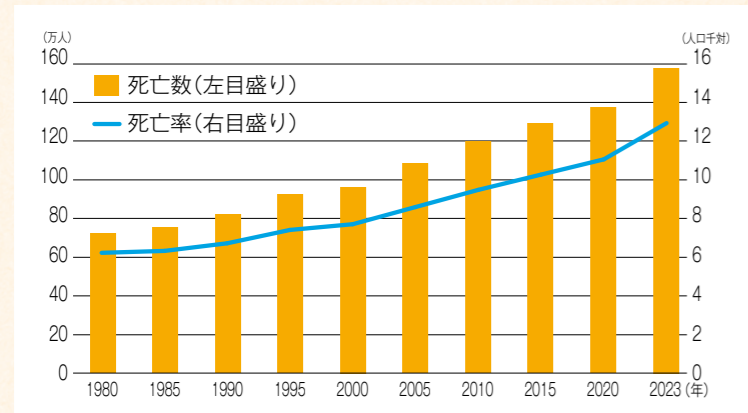
2023年令和5年  
能登半島地震

2024年令和6年1月  
能登半島地震

### 多死社会到来と葬儀・供養の多様化

団塊世代が高齢化し、死亡者数は年々増加。多死社会の到来に伴い、斎場や墓地の処理能力の不足が懸念され、葬祭業の需要もさらに高まった。斎場の建設ラッシュが続く一方、家族葬など葬儀の小規模化志向、樹木葬や散骨葬、永代供養、手元供養、ペットとの共葬墓地など、葬儀や供養に対するニーズは多様化している。

#### 死亡数・死亡率の推移



厚生労働省「令和5年人口動態統計」より

### 終わらない「終活」ブーム

「人生の終わり方を考える活動」を意味し、2012(平成24)年に大流行した言葉だが、一過性のブームに終わらず以後も定着。背景には、頼れる家族・親族がいない世帯や、「家族に迷惑をかけたくない」と考える層の増加などがある。いわゆる「断捨離」、金融情報などを「エンディングノート」に綴るといった活動が代表的で、葬儀の生前予約や生前契約を自分で行うケースも。

#### 「墓じまい」への関心高まる



「墓じまい」とは、墓石を解体・撤去して墓所を更地にし使用権を返還すること、あるいは改葬(墓の引越し)や合葬(合祀)を行って墓を処分することを指す。2014年頃から墓石事業者を中心に使われ始め、墓地の継承・管理者の不在や疎遠化による「無縁墓」の増加も社会問題化したことで全国的に進められるようになった。

### 葬儀の簡素化・小規模化

1990年代半ば以降、高齢化社会の進展や家族観の変容、地域コミュニティの弱体化などを受け、密葬や家族葬が増加。2020(令和2)年のコロナ禍の到来が決定打となり、家族葬が一般葬を凌駕し、一日葬や直葬・火葬式も浸透した。いわゆる「三密」回避策の一環として、オンライン葬儀の実施を提供する業者も現れた。アフターコロナにおいては一般葬も回復傾向にあるものの、依然として家族葬が優位であり、葬儀の簡素化・小規模化の流れは不可逆の様相を呈す。

### 斎場・葬儀会場の変容

家族葬に特化した斎場・葬儀会場の需要が高まり、閉業したコンビニエンスストアやファミリーレストランなどの居抜き物件を改装した小型セレモニーホールも続々と登場。ロードサイドという利便性の高さを生かし、商圈を小さくし、より地域に密着したサービス展開を志向する。



家族葬のファミラル泉玉露(福島県いわき市)

## 全互協50周年

3月15日を「冠婚葬祭互助会の日」と制定

### 「エンバーミング」の浸透

死後体内に残る血液を防腐剤(薬液)と入れ替え、故人を生前の姿に近づける修復・衛生保全技術のことをいう。近年、日本でも実施件数が伸びており、1988(昭和63)年に191件だったものが、2024(令和6)年には8万2千件を超えた(日本遺体衛生保全協会調べ)。エンバーミングを施した遺体は、常温で10日~2週間ほど安全に保つことが可能で、費用も15~25万円ほどで行えるとあって広がりを見せている。

●主な参考文献:『歴史のなかの家族と結婚—ジェンダーの視点から』(監修:服藤早苗/森話社)、『日本葬制史』(勝田至/吉川弘文館)、『冠婚葬祭のひみつ』(斎藤美奈子/岩波新書)、『図説写真(明治百年)の歴史』(講談社)、『葬儀業 変わりゆく死の儀礼のかたち』(玉川貴子/平凡社新書)、『死を考える』(編「エース」編集室/集英社インターナショナル)、『互助会保証五十年史』(互助会保証株式会社) ●写真提供:橋本信明氏(P1下段の3点)、国立国会図書館、高槻沢町図書館 ●写真:毎日新聞社、読売新聞社、AFLO、PIXTA